
読み専門の厨二病患者がI Sを書いたらこうなった

十目六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

読み専門の厨二病患者がISを書いたらこうなった

【Nコード】

N2566U

【作者名】

十目六

【あらすじ】

原作ではただ一人の男性IS操縦者。だがその二年前にもう一人の操縦者が発見されていた。所謂テンプレ最強最低系。しかもそれを初心者を書いてしまった。まあ暇つぶしになるかもわかりませんが、それでも良ければどうぞ。

たぶんプロローグ（前書き）

注意：これは所謂テンプレである。苦手な方は戻ることを推奨します。激しく。

たぶんブローグ

初めは何も考えず振るつていた。気付いたらそれを握っていた幼年時代。次第にその行いには意志を持ちながらするようになり、目標に届くためにひたすら猛進した。まだまだ頂には届きそうにないが、それでも登り続けるだろう。目指す道は険しく厳しい……。それでも俺は――

ジリリリリリイ！

目覚まし時計の鳴り響く音。夢からさめ起き上がる。時刻はAM 5:30。まだ寝ているだろうルームメイト兼幼馴染を起こさぬよう（もつとも目覚ましの音で起きてしまったら別だが）静かに洗面所を目指す。

どうやらぐっすり就寝中のようだ。それもそうか。いきなりあんな環境に陥れば疲労がたまるのも仕方のないことだろう。

自分の場合は習慣のせいでこの時間には起きるようにしている。もつとも嫌々ではなく自主的なものだが。

洗面所である程度身だしなみを整え、おそらく部屋には戻っていないだろうから置手紙を置いて荷物を持って部屋を出る。

廊下にはだれもおらず、昨日はあんなにも騒がしかったのにこうも静かだと少し物寂しさを感じる。もっともこんな時間まで騒がしかったらあの人の雷が落ちることは請け合いだ。などくだらない事を思いながら目的の場所まで歩を進める。

ついた場所は剣道場。昨日のうちに使用する許可をもらいカギを預かっている。道場に荷物と自身の相棒を立て掛け、軽くストレッチとランニングを行う。

程よく体が温まったところでいつものメニューを行う。ちなみに使用する剣は真剣だったりする。もちろん扱う資格も持っているし学園側にも許可を得ている。さすがにこの年齢で捕まりたくはない。

剣を振り続け四半時ほど過ぎたころだろうか、何やら視線を感じる。もっとも敵意はなく、そしてこの気配から察するにおそらく彼女だろう。見られたところで特に問題もないので型が終わるまで続けることにする。

型を終え視線のする方向に振り向く。そこにいたのはやはり自身の幼馴染の1人である篠ノ之箒であった。

「すまない、邪魔をしてしまったか。相変わらず刀器の剣筋は見事だな。いや昔から凄まじい剣士であったがさらに腕を上げたようだな」

と無性にうれしそうな顔で話しかけてきた。彼女も女子中全国優勝するほどの腕前を持つ剣士だ。競う相手がいてうれしいのだろう。

「いやちょうど型が終わったところだから何も問題ないよ。まああれから六年たったんだ、俺も強くなっているさ。もっともいまだ

あの爺には負け越しているがな……」

「はははっ……。相変わらず先生はお元気そうだな」

箒はそう言いながら苦笑する。あの無敵老人を想像しての事だろう。

俺がこの剣の道に進んでいるのも家の爺が影響している。気付いたら剣を持っていてそして毎日のようにボコられていた。今更ながら思うが幼児虐待だったよな、あの修行という名の苦行は……。

もつとも爺さんには感謝している。親がいない幼少時代、なんだかんだ言ってさびしかった記憶がない。そう考えると俺も大概お爺ちゃんっ子だったのかもしれない。自分で言っておいてなんだか気持ち悪いが。

「まあ爺の事は置いておいてだ。箒、お前も朝練か？」

「ああ。まだ部活も始まっていないからひとまず走っておこうと思ったのだが、道場のほうから音がしてな。気になって見に行ったらお前がいたというところだ」

なるほど、道理で少し火照っていたわけだ。なんというか少し色っぽい……。そんな俺の視線に気づいたのか、なんだ？と首をかしげているが俺は少しあわててなんでもないと答える。クエスチョンマークを浮かべている彼女はなんというか可愛らしい。ていうかなんでこんな色ボケ思考になっているんだと意識を切り替える。そしてふと気づく。

「そっぴや箒」

「ん？なんだ」

「おはよう」

俺はそう言つと箸ははつとして少し顔を染めながらおはようと返事をした。そんなこんなのIS学園2日目の朝であつた。

たぶんプロローグ（後書き）

初めまして十目六と申します。今まで読ませてもらう立場だったのですが暇だったから気まぐれに書いてみた。そんな文です。いつまで続くかは気まぐれなのでわかりませんがよろしくお願いします。

第一話

インフィニット・ストラトス——通称ISは元々、宇宙空間の活動のためのマルチフォーム・スーツとして今からおよそ一〇年前にうちの近所の幼馴染の姉が開発した機械？ である。もっとも今では宇宙開発という目的に反しもっぱら兵器としての運用が世界共通だったりする。実際は兵器としての運用はIS委員会から禁止されておりスポーツとして使用されている。裏ではどうかは知らないが……。

このISが世間一般に知られた事件が白騎士事件というのだが、簡単に言えば日本に向かってきた千発以上のミサイルをIS一基で撃ち落としたということんでもない事件である。

この事件によりISの性能は世界に知られ、今までの兵器を鉄くずへ変えた。正直兵士泣かせだなと思ったのが当時の感想だったりする。

もっともこのISには大きな欠点があり、それは女性にしか騎乗できないという欠陥兵器だということだろう。だがその性能は既存の兵器をはるかに上回っていることから各国で運用されている。

ここで生まれたのが女尊男卑という風潮である。たしかにISに乗ることができる女性はいかるべき待遇があってもいいだろうが、それがすべての女性が偉いということにつながるのかはいまだに謎の風潮である。

ひとまず話を戻そう。ここでISを運用するうえで教育機関が必要ということで設立されたのがIS学園である。先に述べたようにISを使用できるのは女性のみである。ならばその学園はどうなるか、答えは簡単で女子高というのが普通だろう。

だがこの常識が覆ることになるのが今から二年前のことである。前途でも記したようにISは女性にしか使えない。しかし例外が現れたのである。一人の少年がISを起動させてしまったのである。その名は桐咲刀器。つまり俺である。

一話 一日目

IS学園一年一組。その中では二つの異色が存在した。一人は俺。そしてもう一人が織斑一夏。もう1人の幼馴染である。

何やら受験に行ったのだが道に迷ってしまい、たまたま入った部屋にISがあつて、それを起動させてしまったらしい。話を聞いたときはそんな馬鹿な、と思ったが実際起動させているのだからそうだったのだろう。こうして世界二人目の男性IS操縦者が誕生したのである。誕生までの過程にはあきれるが。

それにしてもこの女28：男2というこの状態、俺もそうだがそれ以上に一夏はガチガチに固まっている。正直こつも視線が集まるのは気がめいつてしまう。気を紛らわせようと一夏に話しかけようにも、あつちはそれどころではないみたいなのでほっておくことにする。

少し時間が経ち、担任の先生が教室に入ってきた。山田真耶先生

というらしい。教室の状況に少し戸惑っていたようだが簡単な挨拶をすませ、自己紹介を促してきた。順調に見えた自己紹介もあるところだ。ストップする。言うまでもないだろうが一夏のところである。

「——織斑一夏です。よろしくお願いします」

ここまでいい。なんだか助けを求めるかのように俺のほうを見るが俺にどうしろというのだ。さっさと言えと目で促す。諦めたように一夏は言葉を続ける。

「……………以上です」

……一夏よ。さすがにそれはないんじゃないか。他に言うことあるだろ。ほら後ろ見ろよ、後ろで女子が数名ずつこけているぞ。

スパンツ！

何かが叩かれる音。見ると一夏の前に一人の女性が出席簿を構えて立っている。俺もよく知るその人物の名は織斑千冬。一夏の姉にして世界最強のIS操縦者である。ちなみに剣士としても凄まじい強さを誇り、うちの爺に教えを受けている。もっとも流派は違うが。

そしてまた一夏が馬鹿なことを言い殴打を食らっている。まあほっておこう。こちらまで被害を受けかねない。

「諸君。私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物の操縦者にするのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。できないものはできるまで指導してやる。私の仕事は弱冠一五歳を一六歳まで鍛えることだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

千冬さんいや織斑先生、なんか軍隊みたいな乗りですね。なんて
いったら殴られるのは必至なので黙っておく。

それにしても女子に対する人気は凄まじいものだ。だがそれも仕方
のないことかもしれない。なんとたつてその容姿はそこのモデル
も裸足で逃げ出すくらいだし、なによりISの先駆者であり第一回
モンド・グロツソの総合優勝者。雑誌のグラビアや取材なども受け
ているみたいだし知名度は半端ない。

「まったく、お前というやつはろくに挨拶もできんのか。ふん。
では桐咲。他人のふりしていないでこの馬鹿に手本を見せろ」

黙っていたことがあだとなつて帰ってきた！？ 仕方なしに重い
腰を上げる。窓際にいる六年ぶりに会う幼馴染の篠ノ之箒とふと目
が合い、微笑むとふいつと視線を外す。……まあいいか。

「——はあ。桐咲^{きりなき}刀器^{とうき}です。皆さんもご存知かもしれませんが
が二年ほど前、ISを起動させ世間を騒がせたものです。趣味は剣
を振るうこと。ほかは読書やゲームなんかもします。特技は剣術で
すかね。うちが道場として幼いころから嗜んでいます。男子が俺と
一夏しかいないので迷惑をかけることも多々あると思いますが宜し
くお願いします」

静まり返る教室。……えっと俺なんかおかしいこと言っただろう
か。その瞬間——

キャ——！！！！

歓声という名の奇声が教室に響き渡る。いやいやなぜこうなる。

千冬さんならわかるが俺でこうなるのはおかしいでしょ。まあ物珍しさでもあるのだろう。もっとも自身の容姿はそれなりだという自負はある。別に過大評価でも過小評価でもなく。それでも一夏とそれほど差はないくらいだ。なのにこの差は……ああさっきの挨拶か。

取材なんかもたまに受けるしちょっとした有名人に会った感覚なのだろう、たぶん。ちなみに箒はというと少し不機嫌そうであった。

「静まらんか！ まったく馬鹿者どもが。織斑。お前もこの程度の挨拶位はして見せろ。それではS H Rを終了する」

ちなみに一限目はI S基礎理論の授業であった。隣で一夏がうんうんと唸っていたことをここに追記しておく。

一限目が終わって休み時間。一夏はぐったりとうなだれている。そんな姿に苦笑していると声がかかる。

「少しいいか」

その凜とした声。さっきは少し遠めだったがその姿、声は昔の面影を残している。篠ノ之箒。俺と一夏の幼馴染である。いやなんとどうか綺麗になったな。

「おい！」

少し感慨にふけていたみたいである。あわてて返事をする。

「わりいわりい。そうだな、ココだとあれだし教室を出るか。周

りがこうだとまともに話ができん」

そして立ち上がり一夏も連れて行こうと思ったがなんかピクリともしないしなあ……。仕方なく一夏は放っておき教室を箒と共に退出した。

着いたのは屋上。まあ休み時間は少ないし早々話さないと千冬さんの出席簿を食らうことになりそうだ。

「久しぶりだな、箒。六年ぶりか。手紙のやり取りをやっていたから元気なのはわかってているが、まあ元気そうで何よりだ」

手紙のやり取りというのは結構厳しい規制があつたりした。なんといっても箒はISの開発者である篠ノ之束さんの妹だ。そんな重要人物の親族ということなので他国から狙われる可能性も十分に含んでいた。よって日本政府は秘密裏に篠ノ之家を保護していた。そのため警備は厳重であり、手紙を届けるのも難しい。二年前まではろくなやり取りはできなかったが、IS関係で束さんに会い、その時に手紙を渡すように頼んだのである。

「ああ。その、いきなりのあの手紙は驚いたぞ。姉さんが突然来たことにもだが、お前から手紙が来るなんて思いもしなかった。えっと、お前もあの時は忙しかっただろう？」

「まあ……。少し厳しい時期だったけどさ、お前と連絡取れるなら別に苦じゃなかったよ。それに俺の手紙なんて自分の事とか一夏の事とかしょうもない事ばかり書いてあつただろ。わりいな、手紙なんか書いたことなかったからあんなことしか書けなくてさ」

すると箒は頬を赤くして首を横に振る。

「そ、そんなことはない。私は嬉しかった。刀器からの手紙にいつも励まされていて、その、学校も転々としていたから友達はできたが深い関係ではなかった。そんな中お前の手紙をみて繋がりがあるって実感できたんだ。私は一人じゃないって……」

やっぱり寂しかったんじゃないか。手紙では気丈に振舞っていたが、それに感づいてはいたが何もできなかった昔の俺が恨めしい。

「そっか。でもさ、これから三年間は俺も一夏もいる。それに友達だってたくさんできるさ。なんたって寮生活だしな。まあこれから毎日いやでも顔を会すだろうが宜しく頼むよ、箒」

にかつと笑いかけながら腕を差し出す。それにつられてだろうが箒も先ほどの暗い顔は消え俺に微笑む。やっぱりこいつは笑っていたほうがずっといい。そして俺の手を握り

「宜しくな、刀器」

暫らく見つめあっていたのだから何だかお互い気恥ずかしくなり手を離す。離れた時、箒から“あつ”と聞こえたがまあ聞こえなかったことにする。なんというかこいつの少しのしぐさがすごく可愛らしく見えてしまう。

そんな空気の中、二限目の鈴がなり二人そろって遅刻して千冬さんに殴られたのは余談である。

二限目の授業。頭がジンジンするが授業に集中することにする。まったくあの人は上手い打ち方をするな。頭に響くが傷は残らない。うちの爺といいどうしてあんなに人の頭をボカボカ殴る……。

閑話休題。二年前からISに関して知識を蓄えていた俺にとって授業はそう難しいものではなかった。もっとも俺の隣となると話は別のである。というか何故ここで躓く？ きちんと入学前の教本を読めば問題ない範囲のはずなのだが。

そんな一夏を見かねたのか、山田先生が態々訊いてきた。その応答がこれである。

「織斑君。どこかわからないところはありますか？ わからない事があったらきちんと訊いてくださいね。そのための先生なんですから」

「先生！」

「はい！ 織斑君！」

「全部わかりません！」

……お分かりいただけただろうか。どうやら一夏君は教本をまったく読んできていないようである。

さすがの山田先生もこれには困惑気味。なんと一夏は教本を電話帳と間違えて捨ててしまったようだ。
スパンッ！！

あ、殴られた。

「織斑。貴様はここに自ら望んできたわけではないとも思っているのだろう。だがな、人というのはどんなにいやであろうとその集団でなければ生きてはいくことができない存在だ。それすら放棄するということは人を辞めるということだ」

まったくもって道理である。さすが千冬さんということが違う。それに俺たちはこの倍率何万倍という学校に言い方は悪いが他人を蹴落として入学しているのだ。そこどころきちんと理解しなければなるまい。

「仕方あるまい。桐咲。この馬鹿に教本を貸してやれ。男同士だから教え易かろう。織斑。この教本を一週間で覚えろ」

「ちょ、一週間ってこれを――」

「いいな」

有無を言わさない一言に一夏もはいと言って黙ってしまっしかなかった。

「悪いな、刀器。俺の勉強につき合わせちゃって」

二限目が終わりその昼休みの出来事である。

さっきの授業で少し反省しているのか一夏が俺に謝ってくる。

「まったく。まあ復習にもなるし問題ねえよ。あとこの教本はや

るよ。もう内容覚えてるし、重要なとこやわかりづらいところはメモ書きを入れているからそれなりに役に立つだろ」

すると一喜一憂とはこのことだろう、途端に喜び顔になる一夏。後でジューズおごるからなどと調子のいいことを言う。

「ちよつとよろしくて？」

金髪にたてがみロール、その立ち振る舞いはどこかの貴族のお嬢様を思わせるかのような美少女が俺たちに話しかけてきた。

「訊いていますの？ お返事はどうしたのかしら」

なんだかイマイチいい印象を持ってないままの俺だが、一夏が答える。

「あ、ああ。なにか俺たちに用でもあるのか？」

「まあ！ わたくしに話しかけてもらっただけでも光栄なことですよ、その気のない返事はなんですの？ もう少しましな態度はとれませんこと？」

はあ、やはりこういう手合いか。隣を見るとどうやら一夏もうんざりしているようだ。

「悪いな。そうは言われても俺たちは君の事を知らないんだ。申し訳ないんだが名前を伺ってもいいだろうか？」

俺はなるだけ丁寧に訪ねたつもりだがこの少女には、まったくもって効果がなかったようだ。

「まあ！ わたくしの事を知らない！？ イギリス代表候補生でもあり、学年主席でもあるこのセシリア・オルコットを！」

いやそうは言われても代表候補生なんてあまりいないが、すべての国の人物を覚えておくなんて普通無理だぞ。それに自己紹介も千冬さんがぶった切っちゃったから一夏以降は俺以外自己紹介してないし。

隣の一夏はポカーンとしながら俺に訪ねてきた。何か嫌な予感がするの長年こいつの幼馴染をしている感が働いているのだろうか。

「なあ、刀器。代表候補生ってなんだ？」

その一言で教室の空気が一瞬で凍りつく。えつと一夏さん？ それはギャグですか？

するとだオルコットは身を震わせ、顔を赤くしている。そりゃこの問答じゃ馬鹿にされていると思われるも仕方ないだろう。

俺は抑えることのできないため息を吐きながら一夏のフォローに回る。

「あー、一夏？ 代表候補生ってのはその名の通り、その国のISの代表の一步手前の候補選手。代表はわかるだろう？ 例を挙げるなら千——織斑先生が昔日本の代表だっただろう。その代表選手のいわば補欠かな。まあ言ってしまうえばエリートって言葉が適当だな」

俺の説明でようやく分かったのかうんうんと頷いている。というか文字から察しろよ。

「そう！ エリートなのですわ！ 本来ならば私のようなエリート候補生があなた方のような者達と同じクラスというだけでも幸運なことなのですわよ。よろしくって？」

どうやら復活した金髪さん（オルコットと言っのすら面倒になった）は気を取り直したようである。

すると一夏がそれにさらに火を注ぐ一言を浴びせる。“そりゃ幸運だな”と。どうしてこうもうちの幼馴染は空気が読めないのでしょうか。誰か助けてくれよ。この際、弾でもいいからさ。

そうしていくうちに金髪さんは一夏相手にヒートアップ。そのうち入試試験であつた教官を倒したかどうかに発展し、そこでまた一夏が俺も倒したなどのたまうものだから、また面倒なことになっている。聞いた話では相手が勝手に自爆しただけらしいけどな……。

俺はどうだつたかつて？ すみません聞かないでください。あのことはあまり思い出したくないんです。

一夏と金髪さんの言い合いも授業のチャイムが鳴りひとまず休戦になったようだ。お願いだからこれで静まってください、主に俺の平和のために。しかしこの後、俺の願いなど無下に吹き飛ばことになる。

「それでは、授業の前にこのクラスの代表を決めておかねければならない。再来週にあるクラス対抗戦も控えていることだから早急に決めるのがいいだろう。主に仕事としては生徒会の会議の出席、委員会への参加。まあクラス長という認識で構わない。後決まれば一

年間は変更が効かんからな。自薦、他薦問わん。誰かやる者はいるか」

クラス代表ねえ。正直俺はならないだろうと安心する。何故なら今の状況で十分忙しいことは千冬さんも十分理解しているだろうからだ。いやまて、あの人の事だから無理にでもやれとでもいうかもしれない。

「はい。私は織斑君を推薦します」

「うえっ？ 俺！？」

よしよしこのまま一夏が代表になってしまえ。主に俺の安らぎのために。

「あ、それなら私は桐咲君を推薦します」

「俺も桐咲君がいいと思います」

私も私も、などと声が高まる。それと一夏、お前後で落とす。

「それでは候補者は織斑と桐咲か。他にはいないか？」

千冬さん？ なんかこつちを見ながらにやりと笑ってません？ 冗談ですよ。ただでさえ忙しいのにこれ以上は増やさないでくれ。いや切実に。

「待ってください！ 納得いきませんわ！」

そこで立ち上がったのは先ほどの金髪さん。おお、今はあなたが

天使に見える。そうだそうだ、納得いかんぞ。もつと言ってやれー！

「そのような選出納得いきませんわ。大体男がこのクラスの代表だなんて、いい恥さらしですわ。このセシリア・オルコットに一年間そのような屈辱を味わえとおっしゃるのですか！」

なんか感に触る言い方だがこの際我慢だ。俺は代表なんぞやらんぞー！

「実力からしてこのわたくしがクラス代表になるのが必然でしょう。それを物珍しさからこんな極東の猿なんか任せるなんて、言語道断ですわ！ 大体こんな文化も後退的なところで住む時点でわたくしにとっては耐え難い苦痛ですのに――」

と金髪の言葉が続く。いい加減力チーンと来るな。だが押さえろ。ひと時の感情の暴走が時には最悪の結果を生み出すのはわかっているだろう。

そんな俺の我慢も意味をなすこともなく一夏がぶちまけてしまった。不味い料理で何年覇者気取りだと。

「あああ、あなた！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

いや先に侮辱したのはそっちだからな。そこところはき違えるなよ。

「いいですわ！ 決闘ですわ！」

「いいぜ！ 四の五の言わずそっちのほうがずっとわかりやすい！ それでどれくらいハンデをつける？」

もうこうなつては止めることは不可能だろう。それと一夏。相手は腐つても代表候補生。どちらかというとお前がハンデもらう立場だ。そんなことは周りも金髪もわかつているようで、結局はハンデはなしという形で落ち着いたようだ。よしこのままの流れで行つてくれ。

「さて、話はまとまつたようだな。それでは勝負は一週間後の放課後、第三アリーナで行う。織斑にオルコット、それからそこで知らんふりしている桐咲。お前も参加だ。『いやちよつと織斑先生！？』自薦他薦は問わんといったはずだ。それにお前は推薦してくれた生徒の意思を無下にする気か？ 『いえ何でもありません』よろしい。ではこの三名はそれまで準備を怠らんように。それでは授業を再開する」

もうどうにでもなれ。ただ一言、言わせてくれ。

——どうしてこうなった

そして放課後である。隣ではもはや一日でおなじみになった一夏のうなだれた姿がそこにある。それも仕方のない事ではある。いきなり（もつとも一か月ほど期間はあったが）こんな状況に放り込まれれば誰だってこうなってしまうだろう。

「なんだよ、これ。専門用語ばかりで訳が分からん。この専門用語の意味を教えてくれよ、意味を」

言いたいことはわかる。わかるがそれはお前が電話帳と間違えた

代償と考える。

「よかった。織斑君、桐咲君まだ教室にいてくれた」

この声は山田先生か。一夏と俺に何か用でもあるのだろうか。どうやら一夏の寮の部屋のようだ。政府の厳命により、一週間早くこちらの寮での生活になるようである。

「えつとですね。さすがに男性と女性を同じ部屋にしては問題ということで急遽、桐咲君の部屋に織斑君が住むことになりました……」

それはそうだ男女七歳にして同衾せず、という言葉もあるしな。だが――

俺の顔を察したのだろう山田先生は言葉を紡ぐ。

「桐咲君の部屋は一人部屋ですが、なんとか二人で使ってほしいんです。しばらくしたら個室を用意できると思いますが、こちらの不手際を押し付けるようで申し訳ないんですけど………」

まあ仕方があるまい。一人部屋といってもそれなりの広さがあったし一、二か月ならば問題あるまい。そう答えると山田先生の顔はパアッと明るくなる。何だかこの先生、俺たちより年上のはずなのに同い年か下手すれば年下に見えてしまう。

そのあと一夏の荷物の問題があったが、さすが千冬さんというベキだろう。最低限の用意は持ってきていたようだ。

入浴の問題も出たとき、一夏が何故大浴場を使えないかと尋ねたが、当然のごとく千冬さんが殴り説明した。一夏よ。そろそろ学習

しよつぜ。

そしてついたのが俺の、いや俺たちの寮部屋となる一〇四〇室である。途中女の子たちの視線やら話声やらあったが、さすがに慣れたのだろう、それほど気に留めず歩を進めた。

部屋に入るとベッドが一つと布団が一つ。いや…うんしょうがないか。

「どうする一夏。一人は布団にインすることになりそうだが。俺はどちらでも構わないが」

「いやそれなら俺が布団でいいよ。ここは元々刀器の部屋だろ。それに勉強を教えてもらう身だ、これくらい我慢するさ」

そういうことならば遠慮なく使わせてもらうか。一言悪いなと言
いベッドに腰掛ける。

その後の事だが、どうやら俺も一夏も寝てしまったようだ。お互いこのような環境で疲れが出たのだろう。

こうして俺たちの長い一日が終了した。今日一日でもこれほど濃かったというのにそれ以上に濃い日々が来るのだろうと簡単に予想できてしまう。なんて言っただけで俺たちは世界で二人しかない男性IS操縦者。いくらIS学園が他国に対して不干渉な立場であっても何らかの出来事に巻き込まれるのは必至だろう。そんな日々を想像しながらも、今だけは休息してもいいだろうと誰に言うでもないが、俺は深い眠りに落ちるのだった。

第一話（後書き）

相も変わらずのテンプレ文。こんな感じでたぶん続きます。それで失礼します。

第二話（前書き）

テンプレ発動『撫でポ』！！

この効果は相手を惚れさせることができる！！！！

ハイ本文始まりマース

第二話

IS学園入学初日から一夜明けての朝。箒と共に朝練を行い、清々しい朝を迎えることができた。俺は元々部屋に戻るつもりはなかったのだが、箒はさすがに準備ができていないということだったので、早めに鍛錬を切り上げ、一旦寮に戻ることにした。

昨日は部屋に直行してすぐに寝てしまったためわからなかったが、どうやら箒の部屋はお向かいさんらしい。そのことを知った箒はガッツポーズをとっていたから、顔なじみの俺たちが近くにいることを喜んでいるのだろ。愛いやつめ。

そのあと朝食と一緒に取る約束を取り付け、一旦別れることになった。部屋に入ると、ぐっすりとだらしない顔をした一夏がお出迎えをしてくれたが、何故か無性にむかついたため、そして昨日のお礼を込めてIS関連の分厚い（厚さ一〇?くらい）書物を落としてやった。

「あqあqwせdrftgyふじこip!!!!????」

というおよそ人語ではない謎の奇声を上げて寮を騒がせたことをここに追記しておこう。ちなみにいらなかった置手紙はきちんと処理した。

一夏がいまだに蹲っているが、まあ一夏だし大丈夫だろうという例年の経験から放っておくことにした。

まだ少し余裕があるため、軽くシャワーを浴びて体を清め、朝の諸処の作業を済ませ、部屋に戻る。ああ風呂がほしい……。

“ブンッ” という風を切る音、拳が飛んできました。まあ気配で分かっていたが、どうやら一夏が復活したようだ。もちろん一夏のへちよいパンチは軽くないし、カウンターを喰らわせてやった。さつき書物を落とした腹に。

「……追撃のグラントヴァイパー。ダメージはさらに加速した」

とつい某黄金の鉄の塊で出来たナイトの名言が出てしまったが、まあ一夏が相手だし（ry

それに落とすって言っただろう？ いやあれは脳内の事か。

「……刀器テメー。朝っぱらから何しやがる！！！！ おかげで三途の川渡りかけたぞ！！ なんか死神は美人で巨乳だし、閻魔様は口りっぱかったし……」

とブツブツ言っている。なんか最後のほうは電波が入っているみたいだから放置しておこう。

どうでもいいことをしているとあつという間に時間が過ぎてしまう。男として五分行動を心掛けている俺としては、約束に遅れるのは問題である。

「馬鹿なことを言っていないで、さっさと準備しろ。あと数分で部屋を出て朝食をとりに行くぞ。箒とも待ち合わせしているんだし遅れるなよ」

すると一夏は何か釈然としない顔であったが、イソイソと動き出した。そう言えば昨日一夏と箒、会話してなくね？ など思ったのは余談である。

一夏と箒は出会いがしら簡単な挨拶を済ませ、六年ぶりの再会ということで話も弾み、ゆったりと食堂に向かうことになった。

IS学園の食堂では様々な国からの留学生が多いことから、各国の料理が目白押しであり、さらに安いのだ。まさに学生のお財布の味方である。もちろん我が国の和食も健在であり、そのヴァリエーションも豊富である。

ちなみに今日の朝食は日替わり和食セットBだったりする。和食は日本人が作り出した食の英知であると常々思う、というのはまったくもって余談だ。

「ではたまたまそこにあつたISに触れてしまって、ISを起動させてしまったわけだな、一夏は——」

「そうそう。大体、藍越学園とIS学園を間違えている時点どこか抜けているんだよなあ、こいつ」

「ちよつ、も、もういいだろそれについてはさあ」

今の話題は一夏がISを起動させてしまった経緯についてである。箒は少し呆れ気味ながらもその表情は穏やかである。

「そ、そういえば、箒、それに刀器もなんで昨日助けてくれなかつ

たんだよ。おかげで千冬ねえに殴られたじゃねえか」

一夏が無理やり話題を変更した。ああ、昨日のあのひどい挨拶ね。いやあれはフォローのやり様がないだろ。

「いや、あれは自業自得だろ。なんだよ『織斑一夏です。よろしくお願いします。……以上です』って。あれじゃ今の小学生のほうがもっとまじな事言えるぜ」

「まったく、刀器の言う通りだ。久々に会った私に目線を向けられてもどう対処しろというのだ。男ならばそれくらいは自分で出来ないでどうする」

と俺たちの当然ともいえる指摘を受け、一夏は項垂れるしかなかった。話題転換が悪かったな一夏。

俺たちが和気藹々と話している中、声がかかる。そこにいたのは三人組、たしかうちのクラスメイトだった気がする。そう言えば食堂の視線を独占してた俺たち。まあ世にも珍しい男性IS操縦者なのだから仕方のない事ではあるが。

「あの、私たちも一緒にいいかな？」

どうやら親交を深めるために声をかけてきてくれた様だ。特に断る理由もなく、俺に一夏、それに箒も友好範囲を広げるのはいいことだ。俺は二人に断りを入れ、その三人とも一緒に朝食をとることになった。その時の箒は少し不満げではあったが。

周りは少し騒がしくなったが一つ一つ気にしては身が持たないの

であえて知らないふりをしておく。

「わー、織斑君も桐咲君も朝いっぱい食べるねー。やっぱり男の子だからかな」

「ん？まあこれくらいは普通じゃないか？それに夜はあまり食べないから朝食べないとつらいんだよ。むしろ女子はそれだけで足りるのか疑問なんだけどな」

「そうそう。それに俺は朝に体を動かしてるからこれくらい食べないと力が入らん」

女子たちは一夏の発言に少し苦笑いを浮かべている。一夏よ、女の子にはいろいろあるんだよ。

「あはは……。そう言えば桐咲君は剣道やっているんだっけ？ 朝からすごいねー」

ちなみに自分がやっているのは剣道ではなく剣術である。まあ、そんなことは説明してもしようがないので置いておく。

「もう日課になっているからなあ。それに今日は箒も一緒だったからいつもと違って刺激になったしな。なあ、箒？」

すると箒は自分に話題が振られるとは思っていなかったのか体をビクツと一瞬震わせた。

「あ、ああ。今朝はたまたまランニングをしていたのだが、その時刀器と偶然出会ってな。加わってもいいということだったから、共に鍛錬をしたんだ」

「へー。桐咲君と篠ノ之さんは知り合いなの？」

「ああ。俺と篤それに一夏も幼馴染だ。篤は六年前に転校することになったが、またこの学園で再開したって感じかな」

そのまま他愛もないことを話しながら食を進める。それとここで新情報である。話しかけてきた女子のうちの一人でなんだかのほほんとしている子がいるのだが、どうやらその子は篤のルームメイトらしい。

まったく初めから誘っておけばよかったのと思うが、律儀な篤の事だ。突然俺の知らない子を連れてくるのは気が引けたんだろう。のほほんさん（仮名）も気にしてはいないようだし、まあいいか。

そのあと千冬さんの怒声が食堂に響き渡り、ちんたら食べていると走らされることになりそうなので、ぱっぱと食べてそのまま教室に直行となった。

今日もIS関連の座学の講義だ。隣の一夏はやはりグロッキーである。授業前に予習として見てやったが、そんな少ない時間でできることはたかが知れている。頑張れ、一夏。

授業の内容としては主にISのサポート機能について。でも山田先生。男子二人もいるのにブラジャーでの喩は勘弁してください。教室が変な空気になったが、千冬さんの咳払いでなんとかはなしが戻った。

授業の続きと行こう。ISには意志がありお互いを理解する必要があるとのこと。たしかにISには意志みたいなものがある、というのは束さんから訊いた事がある。まだ各国が研究中の段階であり、またコアについては開発者である束さんしか創れないということもあり、まだまだ謎の部分がある。その束さんにしてもコアについてはわかんないことが多いとのこと。いやいや自分で創ったんだからそこところは理解しようよ、とは思うがとにかくまだまだISにはブラックボックスの部分が多いということだ。そのためISの教科書もまだ研究中であり今後内容も変わってくるかもしれない。

そして休み時間である。俺はともかく一夏はまだ学ぶことが多いため大変である。さらには初日とは違い、慣れてきたのだろうか俺たちはよく女子に話しかけられる。

そんな中話題に普段の千冬さんはどうなのかという質問があった。一夏が話そうとしたところその瞬間、頭を殴られていた。いくら姉とはいえ早々プライベートの事は話すべきではなかったな。

「織斑。お前の専用機の事だが諸事情により用意するのに少し手間をとっている」

なるほど一夏に専用機か。まあ当然といえば当然か。たった二人しかいない男性操縦者だ。ある程度優遇されても不思議ではない。もっとも周りの女子から見ればその反応は凄まじく、しきりに切望のまなざしを向けられている。

「あの、俺に専用機が用意されるのはわかりました。それで刀器にはその専用機は用意されるのでしょうか」

「なんだ、お前話していなかったのか？」

「ええ、プライベートではなるべくISの話題は出さないようにしていましたから。その機会がありませんでして。」

まったく、といった感じで千冬さんはため息を吐いた。しょうがないじゃないですか。そんなこと態々言うとお慢話にも聞こえかねないし、ただでさえこの二年間は学校でも息苦しかったんだ。俺だって友人と遊ぶ時くらいは少し離れたかったのだ。もっともISが嫌いとかそういうことではないので悪しからず。

「桐咲は既に専用機持ちだ。そして特別枠としてIS委員会から国家代表とほぼ同等の権利を持っている」

千冬さんの言葉で教室がざわめきだす。それもそうか国家代表と言えばモンド・グロッソにも出場するほどの猛者であり、並大抵の強さでは為れないのが常識だ。

そして俺のこの権利はごく最近得た物のため知っているものは少なく、驚きも大きかったのだろう。

この理由から俺はクラス代表はやりたくないのである。ただでさえ慣れない書類作業が多いというのに、これ以上増やされてはたまらない。

そんな中、一夏の反応は一応驚いてはいるがいまいち実感がないみたいだ。そして金髪はまるで信じられないものを見るかのような目でこつちを見つめていた。というかそろそろ授業を始めてください織斑先生。こうも人目にさらされるのは慣れてはいるが、あまりいい気がするものじゃないんですから。

その後、気を取り直して千冬さんが一夏に説明していたところ、束さんの話題が出る。箒と束さんの関係に気付いた生徒がいて、それがクラスに知れ渡ることになる。そのことで箒はクラス中から質問攻めになるのだが――

「あの人の事は関係ない！！！」

突然の大声に目をパチクリしてしまう。そういえば箒と束さんはあまり仲が良くない。いやこれは少し語弊があるな。正確には箒が束さんを一方的に嫌っているということが正しいだろう。

まあ理由は察することができる。『IS』だろうな。ISが開発されるまでは仲の良い姉妹だったと記憶している（もっとも六歳ごろなので曖昧だが）。その仲が悪くなり始めたのがおよそ一〇年前。箒にしてみれば家族が転々と移動するのも、俺たちと離れることになったのも、すべては姉が開発したISが原因であるのだから。

俺としては箒も束さんも仲良くしてもらいたいというのが正直難しいのが現状か。機会があれば仲を取り持てるよう努力するとして、今は箒だ。

「箒。落ち着け。今ここで怒鳴り散らしても仕方がないだろう。ほら、みんな驚いているだろ。な？」

普段であればこのように女性の頭をなでることなどないのだが、何かと昔は撫でていたとき機嫌が悪くなったので実行してみた。小学校のころはよく剣のことで虐められていたことから慰めるために撫でていたのである。（虐めたやつは全員再起不能にしてやった）

ここで“なにするかー！”と殴られたとしても場の空気は緩く

なるだろうし、特にデメリットもないからな。てかこいつの撫で心地いいなー、などと場違いなことを考えていたりする。

そうしていると落ち着きを取り戻したのか、顔が緩くなっているのがわかる。

「あう、えっと、と、刀器？ そのわかったから。撫でるのはやめてもらってもいいか？」

“おお、そうか” と言い、撫でるのをやめる。やめるとなんだか名残惜しそうに俺の手を見つめる。ふふふ、愛いやつめ。何だか脳内に『撫でポ』がどうだかとかいう電波がきたが無視しておこう。

「皆もいきなり怒鳴ったりしてすまなかった。だが私ではない。それに教えられることもないんだ」

なんだかクラスのみんなの箒に対する目が温かいものだったのが印象深かった。

「どうやら専用機が用意されるみたいですね。安心しましたわ。まあもつともわたくしが勝利することには変わりありませんが」

授業が終わり次の休み時間。金髪が一夏に話しかけていた。どうやら来週のクラス代表の件だろう。一夏は相も変わらず馬鹿にしているのかそれとも天然なのか、まあ後者だろうが、そういった態度。

箒にも束さん関係で突っかかってきたが、どうやらスルーのよう

だ。いや大人の対応でお兄さんは嬉しいです。

「そういえば、貴方は国家代表と同じ権限を持っているのではわよね。とはいっても私が男などに後れを取るとは思いませんが。精々その名に恥じないことを期待しますわ」

それでは、といって金髪は俺たちの前から立ち去って行った。

箒は俺を侮辱されたと取ったのか少し怒っていたが、宥めておく。まあ精々足をすくわれないようにしろよ、セシリア・オルコット。そんな状態では一夏相手ですら危ういかもしれないぞ。

そして昼休みである。今回は幼馴染三人組で昼食を摂ることになった。まああの後だったからクラスみんなが空気を讀んでくれたのかもしれないと、密かに感謝しておく。

お楽しみの食事はやはり和食である。いや本当にいいよね、和食。このバランスと言い醤油の——（この後の文章はスキマ送りにされました）

「あのさ、刀器、箒。俺にISを覚えてくれないか？正直このままだと、あのセシリアとかいうやつに何もできずに負けると思うんだ。男としてあそこまで言われて引き下がっていらねえ。だから頼む」

「ふん。安い挑発に乗るからだ馬鹿者が」

まあ箒の言う通りなんだけどちょっと冷たいよ。すると一人の女子生徒が俺たちに話しかけてきた。リボンの色が赤いことから三年生だろう。

「君たちだよ。噂の子たちって。代表候補生と戦って聞いたけど、ホント？」

それに受け答えする一夏。ようは俺たちに教えるのはついでで仲良くなるうってことかな。まあ親切で言っているのかもしれないが、二年間を経験した俺としてはどうしても警戒せざるを得ない。

「どうかな？ 君たちさえよければ私がコーチするよ」

一夏が是非と返事する前に箒が遮る。結構です、と。それに突っかかるが相手が悪かった。相手はあの篠ノ之束の妹である。そのネームバリューに負け、その先輩は退散していった。

結局、俺と箒が一夏を鍛えることになり、放課後剣道場に向かうことになった。

バシンツと音が響く。ここは剣道場。一夏を鍛えることになった俺たちなのだが、ISアリーナではなく剣道場にいる。

何故生身で剣を鍛えねばならないのか一夏は疑問に思っているだろうが、実はこれは理にかなった行動である。

ISは人が動かすのである。いくら座学ができようが身のこなしがなっていないのでは意味がない。何よりこれは兵器という名のスポーツなのだから。

それに一夏の専用機はまだどんなものかは不明であるが、大体の

想像はつく。一夏はあのブリュンヒルデ、織斑千冬の弟だ。その千冬さんはブレードたった一本で世界の頂点に立った。ならば、その弟にもその適正があると考えるのが自然だろう。よって高確率で一夏の専用機にはブレードがついている。

よってこの剣道も決して無駄にはならない。間合いの取り方。足運び。剣閃などなど覚えることは山ほどある。正直なところあと六日では足りなすぎるくらいだ。

それに一夏は六年前に一度剣を置いている。昔は箒よりも強く才能豊かであったが、今ではさびた刀に等しい。それを研ぎなおすにはとてもじゃないが時間が足りない。

だが諦めるつもりは毛頭ない。それに一夏もやる気だ。こいつには何か不思議な力がある。不可能を可能にするかのような、まるで舞台の主人公かのような。だがいくら一夏とはいえこのままでは負けは必至。ならば俺はこいつをできる限り強くする。

もつとも、自身の事を疎かにするつもりはないがな。覚悟しておけよ、セシリア・オルコット。お前が歯牙にもかけていなかった男が今、牙をむくぞ。

S i d e : 箒

少し言い過ぎたろうかと思う。幼馴染の一人である少年を思い浮かべる。まさかあれほどまでも弱くなっているとは思ってもよらなかった。

少なくとも昔は私よりも強かった、などと感慨にふける。まったく……と思いながらも自身の頬が緩んでいるのがわかる。たしかに六年という歳月は人を大人にさせる。

昔の生意気だった子供も今では立派な男性だ。いやまだ少し——いやだいが抜けてはいるが、と苦笑する。

そしてもう一人の幼馴染。自身の剣の憧れでもあり、そして初恋の相手……。もう覚えていないほどの幼少から家の道場の付き合いで知り合った少年。

気付けば私の中にいて、気づけばいつの間にかに私の心を埋めてくれた人。虐められたとき、助けてくれてどれだけ嬉しかったか。人付き合いの苦手な私をいつも引っぱり張ってくれたその手。全てが懐かしい、そして大切な私の宝物。

姉のせいで離れなければならなかったあの時は、本当に……本当に……でもあなたの言葉がいつも私を励ましてくれた。一人で泣いていたときもあなたを思い浮かべれば、貴方に相應しい女になるため我慢した。努力した。

そして二年前、突然私の前に現れたあなた。テレビの中だったけれども。その顔は無理してそうでぎこちなかったけれど、やっぱり格好いいあなただった。

極めつけはあの手紙だ。あの姉が現れた時はいつたいなんだと思っただが、今思えば姉からの最高のプレゼントだった気がする。読む

と自然と涙が溢れた。四年も時間の歳月であなたは私の事など忘れていくかと心のどこかで不安があった。でも覚えていてくれた。あなたが言うように手紙の内容は今の彼の状況や学校、もう一人の幼馴染や新しくできた友達の事。少しうらやましく感じたが、それでもこの手紙は私にだけに向けられたあなたからのメッセージ。今でも大事に机にしまっている。

そしてIS学園に入学することが分かった。あの姉の開発した、あなたと私を引き離れた憎い存在であったが、あなたに会うためならば、と必死で勉強した。

勉強の末、私はIS学園に入学した。同じクラスだと知り歓喜した。六年ぶりの再会のため私だとわかってもらえるか、少し不安であったがそんなことは杞憂だった。

たまにテレビに映っているためその姿は見慣れた物だったが、やはり実物を見ると感慨深い。そしてあなたの自己紹介。彼と目が合い微笑みかけられた。わかってもらえた喜びと、恥かしさで目をそらしてしまった。

そのままドキドキする胸の鼓動を抑えきれず、あなたを呼び出した。少し怒鳴ってしまったが、私の強い女だと思われていないだろうか。

屋上での会話。正直何を話したのかあまりよく覚えていない。ただあなたの手は温かくて。

あの頃と変わってしまったこともあったが、それでも変わらないものがあつた。貴方の剣筋は相も変わらず綺麗で見惚れてしまった。

あなたがむかし私が虐められたとき、撫でてくれた掌は子供のころとは違い大きく、ゴツゴツしていて、でも昔と変わらない温度で私を包んでくれた。

あなたが他の女と話しているだけで嫉妬してしまう自身が嫌だ。でもこの気持ちは抑えられないのだ。

私、篠ノ之箒は あなた、桐咲刀器を愛しています。

第二話（後書き）

ネタ要素も入れてみた。まあいいよね。
今回のオリ設定。なんだよ特別枠って……
そして自分会話文苦手なんです。まあここまで読んでくださった方はわかると思いますが。

箒の独白…どうしてこうなった（爆）

皆さんわかっていたと思いますが、ヒロインは箒です。

箒かわいいよ箒……

ま、まあ。次回はセシリア戦になります。戦闘描写どうしよう……

ここまで読んでくださりありがとうございます。

何かご指摘がありましたら、感想なんかで書き込んでもらえると幸いです

もし続きましたら次回もお願いします。

第三話 その巻（前書き）

今回は一夏vsセシリア戦。なんか主人公が一夏みたい…

第三話 その巻

一週間後、放課後のアリーナ会場。俺と一夏そして篤はピットに待機していた。相手の金髪は既にフィールドにてスタンバイしている状態である。

さて何故いまだ俺たち、いや一夏がここに待機しているかと言えば、まだ到着していないのである。そう、一夏の専用機が。

ちなみに戦う順番としては一戦目が一夏vs金髪、二戦目が俺vs金髪、三戦目が俺vs一夏ということになっている。なぜこの順番かというならば、さすがにIS素人に二戦連続は厳しいということなのでこうなった。俺自身、一夏と戦うつもりはなかったのだが、千冬さんの命令で戦う羽目になった。後わざと負けると折衷を喰らう羽目になるらしい……。誰からって？ 言わなくてもわかるだろう？

という理由のため一戦目から俺と金髪が戦うわけにはいけなくなり、ここで待機しているということだ。まああの金髪の性格からしてこの状況は意図とせずうまくい状況になっているのかもしれないが、なんか短気そうだし。

閑話休題。この暇な時間を有効に使わない手はないので、簡単なブリーフィングを行うことにする。

「それじゃあ、簡単な復習でもしておくか。相手の金髪の専用機は『ブルー・ティアーズ』。スペックで見ればオールレンジ攻撃ので

きる中距離型の第三世代機だな。もつともあの金髪の情報からはBT兵器を用いた射撃戦がメインとのことだ。ここまではいいな？」

「ああ、大型銃の『スターライトmk?』に下型ビットのBT兵器の特殊兵装『ブルーティアーズ』が四基に弾道型が二基。あとは『インターセプター』の接近武器だったな。あれだけ叩き込まれたんだ。いやでも覚えるさ」

ふむふむ。きちんと覚えているようで関心関心。できれば射撃戦の訓練もしたかったのだが、俺のISは銃射撃兵装ないし、何より量産機を借りて練習したかったのだが、予約がパンパンで今日までに借りることができなかったのである。まあ二、三年生に優先されるのは仕方のないことだし、予約に行くのが少し遅かったからな。

「それにしても、刀器はよくこんな情報持つて来れるな。まあ助かってるんだけどさ」

「前にも言ったようにこれでも代表と同じ権限があるからな。ある程度のデータなら仕入れることはできる」

そう基礎装備等の簡易データならデータベースから持つて来ることができる。もつとも特殊兵装等の国家機密レベルの機密情報となると無理ではあるが。

「最初は回避に専念しろ。フォーマットとフィッティングが終わっていない状態ではどうあがいても勝は拾うことはできん」

「ああ、それもわかっている。その後、なんとか接近戦に持ち込んで落とす」

これが作戦の大体である。こちらは素人で相手は代表候補生。普通なら勝負にもならないだろう。だが相手は男ということと素人ということと油断がある。そこを突きまずは最低限のシールドエネルギーを保ちながら回避に専念する。ここで挑発等の舌戦に持ち込めればいいのだが、一夏にそれを求めるのは酷なのでそれは教えていない。そして勝負は一次移行後。ファーストシフトそこである技を使い、短期決戦に持ち込む。長期戦になればなるほどジリ貧だしな。本来なら試合前にファーストシフトを終わらせて速攻で短期決戦に持ち込みたかったのだが、まるで狙ったかのような遅れである。過ぎたことは仕方ないが。

「ここで一週間の修練が試される。私と刀器が付ききりで指導したのだ。ふがない結果になったらただではおかんからな」

「ああ、二人には感謝してるよ。せっかく二人に教えを乞いたのに無様な姿はさせないからな」

「ふふつ、まあそう力まず気楽に行け。ここからはお前の舞台だ。まあ……だ。このあとには俺との対戦も控えているわけだ。学んで来い、一夏。そしてその結果を俺にぶつけにこい」

そう言うつと一夏は少し呆けたが、顔を再び引き締め、俺に拳を突き立てた。俺もそれにこたえ、拳を突き合わせる。

そして山田先生がこちらに来て、ISが来たことを知らせに来た。その名は『白式』。なるほど『びやくしき』か。違う読みでは『しるしき』。つまりそうということなのだろう。

一夏は『白式』を装着し、舞台に舞上がる。

行つてこい、親友。楽しんで来い。

Side： 一夏

舞台上上がるとそこには一機のIS。『ブルー・ティアーズ』。
俺の今の対戦相手、セシリア・オルコットの専用機。その姿はどこ
か王国騎士のようで、空中に舞うフィン・アーマーは主人を守るか
のごとく、周りを動いている。

「あら、逃げずに来ましたのね。あまりに遅いものですから、逃げ
てしまわれたのかと思いましたわ」

「はっ、抜かせ。別に逃げる理由なんざ、ねえよ。買った喧嘩だ。
堂々と受けてやるさ」

「……成程。そこまでの覚悟がありましたら、チャンスはいりませ
んでしたわね。せつかくここで謝れば許して差上げたのに」

「それは、チャンスとは言わねえよ。そんな無様な真似したら、
このあときついお仕置きがありそうだしな。なによりそんなことし
たら、俺自身が自分を許せなくなる」

そして開始合図のブザーが鳴る。それと同時にセシリアは射撃体
勢に入る。

「ならば、お別れですわね!!」

刹那。閃光が迫りくる。体をよじり回避するが少し掠めてしまっ
た。ちっ、ダメージは低かったものの、しょっぱなからシールドエ
ネルギーを減らしてしまった。

だがファーストシフトまでは耐え忍ぶしかない。それまでは『白式』を体になじませ、できる限り自身のものにする。なんとか踏ん張ってくれ、『白式』！」

「それでは踊りなさい！ わたくしセシリア・オルコットとその専用機『ブルー・ティアーズ』のワルツで！」

そんな俺をあざ笑うかのような銃弾の嵐。回避しようにも必ずどこかで積んでしまう。このままでは持たない！『白式』！ なにか装備は……！

そこに表示されたのは一本のブレードの図面。てこれしかないのかよ！ 刀器の言う通り、ブレードはあった。あったがブレード一本とは聞いてねえぞ……！

愚痴を言っても銃弾からは逃れられるわけでもない。ブレードをコールし、構えて迎撃の体制を取る。

「はっ！ 中距離型の私に対して、近接型の武器で挑もうなんて。笑止ですわ。簡単に近づけるとは思わない事ですわね！」

わかってるさ……そんな事。言われるまでもねえ！ ファーストシフトまでおよそ二〇分。それまで何とか持たせて見せるさ！

左！ その次は右上！ ……回避、回避、そして回避。まずい、誘い込まれた！ 回避が間に合わないため、ブレードで迎撃する！

「先ほどの威勢はどうしたのかしら？ 逃げてばかりでは私に勝つことはできませんことよ！」

くっ！　今はお前の挑発に乗っている場合じゃないんだよ！！

「――開始から二七分。このわたくしと『ブルー・ティアーズ』を相手にして、よく持ったほうですわね。素人でありながらこれほど持ったのは、あなたが初です。認めましょう、貴方がただの愚鈍な男ではないということを。わたくしもあなたに敬意を表し本気でやりましょう」

そりやどうも、と軽口を叩きたいが今は集中する。というかやはり本気ではなかったか。確かに本気であれば俺なんか一瞬でやられていただろうからな。だがここが勝負どころだ。回避に専念したが、だいぶダメージを受けてしまった。データではわかっていたものの、あのフィンは厄介極まりない。さらには弾道型もまだ使われていない。手を抜かれている証拠だろう。おそらく、チャンスは一度きり。そこで決めなければ俺の敗北だ。

「ここまでですわ。そろそろフィナーレと参りましょうか」

セシリアは四つのフィンをこちらに標準を合わせ、自身は大型銃口でこちらの狙いを定める。

ここまででわかったことは、フィンを操作しているとき、本人は機動ができない事。そして同時攻撃ができない事。もちろん、相手が手を抜いて動いてないだけ、というのも否めないが。今も動きがないということは俺の予想は当たりだろう。あのセシリアの性格上、あの言葉に嘘はないだろうから。

迫りくる猛攻。なるほど今まで本気でなかったというのは本当だった。フィンの動き、銃の連射速度、今までとは段違いだ！俺自身も白式の操作に慣れてきたものの、これは厳しい。こちらから隙を見せてそこを突かせようともさすがは代表候補生。引つかかりはしないか……！避けるのにも次第に限界が来る！……っ！追い込まれた！？

「これで終わりですわ！」

俺に向かう閃光。ああこれは避けられない。俺は一瞬で悟ってしまった。悪い、刀器、箒。

そんな中、唐突に現れるウィンドウ。俺はこれに賭けるしかなかった。

S i d e : 刀 器

「一夏……！」

箒の心配する声がピットに響く。が、俺には見えた。おそらく終わったのだろう。

「ふん。機体に助けられたな。未熟者め」

千冬さんはそう言って少し笑いながら、画面に目を向けている。なんだかんだ言っても千冬さんは一夏を溺愛している。まああまり顔に出さないけどな。

すると突然頬に痛みが！？　ちよつ、何するんですか！？　千冬さん！

「なにか、馬鹿なことを考えてそんな顔をしていたからな。それと織斑先生だ」

そう言つて出席簿を喰つた。うつ……いいもん！　簿に慰めてもらうから！

そのあと簿を真つ赤にさせ、また千冬さんに殴られたのは言つまでもない。

Side：　一夏

「なつ……！　まさかこれはファーストシフト！？　貴方まさか初期設定だけの機体で戦っていましたの！？」

やられていないということは、どうやら賭けには勝つたみたいだ。白式はファーストシフトし、漸く俺専用の機体ということになったというわけだ。だがここからが本当の勝負。

機体の変化も然ることながら、その武器もまた変化していた。

その名も

接近特化ブレード　『雪片式型』

雪片——かつて自分の姉、千冬が使用し、これ一本で世界の頂点

まで行った至高の一振り。弑型ということはその後継にあたるのだろつ。

「……ああ俺は最高の姉を持ったな」

「貴方、なにを言っていますの？」

そんなセシリアの言葉を見殺し、言葉を紡ぐ。思い浮かべるのは六年前、二年前そして今までのすべての事。

「いや、これには少し語弊があるか。俺は最高の姉と最高の親友たちを持った。俺はそんな人たちから守られてきた。ならば俺も守る。今はまだ弱いけどさ。でもいつか必ず、守って見せる！」

「……さつきから何を言っているかは知りませんが、こちらとて容赦する気は一切ありません。さあ、来なさい！ 織斑一夏！！」

「はっ！ 行くぜ、セシリア・オルコット！！ ここから俺の全力全開だ！！」

そして俺は切り札を切る。親友から教えてもらった、とっておきを。これに失敗すれば俺の敗北は間違いない。だが何故だろう、今は失敗する気がしない。

足に力を籠め、スラスタにエネルギーを放出し、それを集め収束する。そして爆発させるイメージで踏み込む！

イグニッションブースト
『瞬時加速！！』

俺は加速し、音を、世界を置いていく。そしてセシリアの後ろに

回り込んだ。

「なっ……!!?」

驚きを見せるセシリア。しかし相手は歴戦の操縦者。突然の出来事に一瞬驚くが、すぐに冷静さを取り戻す。

「ですが、ティアーズはさらに二基ありましてよ!!」

「ああ！ こつちもそれを予想済みだー!!」

ブルーティアーズのミサイルを切り落とし、セシリアに切り込む。

勝った！ そう思ったが俺は忘れていた。今までの射撃戦でセシリアの唯一の接近武器を一瞬、頭から消えていたのだ。

「……つつつ！ 『インターセプター』!!」

だがもつ止まることはできない！ 構わず雪片式型を振りおろす。

俺の『白式』とセシリアの『ブルー・ティアーズ』が交錯する。

俺の雪片式型はセシリアに……届いた!!

そしてブザーが鳴り響く

『勝者 セシリア・オルコット』

たしかに俺の剣はセシリアに届いた。が、どうやらセシリアのインターセプターも俺に届いており、シールドエネルギーを削りきる前に俺のエネルギーが底をついた。

結果だけ言えばそういうことだ。後に千冬ねえから訊いたのだが、どうやら『零落白夜』という単一使用能力ワンオフアビリティが発動していたらしい。これは相手のエネルギー残量関係なく絶対防御を発動させ、大幅に削る、一撃必殺のものらしい。

だがなぜ当たったのに負けたのか。単純に斬撃が浅く、全てが届く前にワンオフの燃費の悪さと先にもあるように、セシリアのインターセプターのダブルコンボでこちらのほうが早く削れてしまった。それだけの事。もともとダメージも大きかったからな。

「——くそ。俺の負けか……………」

そして俺は負けた。親友二人にはあそこまでしてくれて申し訳ないが、とても清々しい気分だ。今の全力は出し切った。それをセシリアが上回っていた。それだけのことだ。

だが今度は負けない……！

俺のIS戦闘初戦はこうして幕を閉じたのである。

余談ではあるが何故か俺を見るセシリアの目が少し熱っぽかった

のをここに記しておく。

第三話　その巻（後書き）

ということとでセシリア勝利ということとで。

まあ普通素人が勝てる相手でもありませんし。

そしてやはり戦闘描写はむずい…。

初めてなんでこれで勘弁してください。てへぺろ（・ω・）

次は刀器vsセシリア戦。

今回より内容薄くなりそう…

ここまで読んでくださりありがとうございました。

第三話 その式（前書き）

今回は、いや今回も難産。

第三話 その式

「悪い。無様にも負けて帰ってきた」

「いやそんなことはない。戦いの内容もそう悪いものではなかったし、キレもよかった。結果として負けはしたが、いい勝負だったと私は思うぞ」

箒が慰めの言葉をなげかける。それにしても、あのイグニツションブーストはよかった。教えた身としてこんなことを言うのはなんだが、普通は教えただけじゃ使える代物じゃないんだがな、あれは

「結果は結果だ。しっかり受け止めて次に生かせばいい。まあ俺に言われんでもわかっているとは思うがな。一先ず、おつかれ、一夏」

「ああ、ありがとう。でも負けるってこんなに悔しかったんだっけな。真剣勝負なんてここ数年やってなかったからな……」

一夏は悔しそうに拳を握りしめる。よほど悔しかったのだろう。一夏がもし剣道を続けていたら結果は変わっていたかもしれない。もつとも、それはあくまでも“もし”だ。なにはともあれ大健闘であろつ。

「ふん。相手が初めに油断していたから、このような内容だったが、本来なら相手にすらならん。今回の事に過信せず、精進しろ」

「まったく、千冬さんは。別にそこまで言わなくても少しは褒めてもいいのに。……………これだからクーデレは（ボソツ）」

「ふん！」

オウフ！ 聞こえたのかよ……地獄み——いえなんでもありませんごめんなさい。なんかこれ毎回やってる気がする、このやり取り……。場が和らいだからいいんだけどさ。

「んんっ！ では小休憩ののち、第2戦目を行う。桐咲、準備しておけ」

俺の番……か。さてやるか。

一回戦が終わって数十分。アリーナ、金髪も準備が終わったようなのでピットで相棒を展開しスタンバイしている。行くぞ、『建御雷』

『建御雷』……雷神、そして刀神の名を冠する俺の専用機。世代としては第三世代の完成型……らしい。束さんが言うからにはそうなのだろう。紫を基調としたカラーに、背中のスラスタが六基。鞘に収まった直刀が一本。装甲が薄めの接近高速機動型の機体である。

「それじゃ行ってくる」

「ああ、勝てよ。刀器」

「あたぼうよ！ 一夏、よく見とけよ。この後の対戦相手は俺だ。手を抜くつもりはないからお前も全力で来い」

「……ッ。ああ！俺も負けるつもりはない！俺が勝っても恨みっこなしだぜ？」

「はっ！ 抜かせ」

お互い好戦的な笑みを浮かべる。ここ最近と比べてずいぶんともな顔をするようになったんじゃないか。それでこそ一夏だ。ここからは言葉など必要ない。あとは剣を交えるのみ。

「……刀器」

うつむき具合の箒。ん、どうかしたのか？何だか若干、顔が赤い気がする。

「その……だな。……この試合に勝ったら……その——」

言葉を詰まらせる箒。いまい何が言いたいのか、よくわからない俺は首を傾げるばかりである。そして何か決意したのか、顔を上げる。

「——何かあったほうがやる気も出るだろう？ だから……わ、私から何かご褒美をやるう。だから、必ず勝て！ 刀器！」

キョトンとする俺に、箒は顔を真っ赤にして再び俯いてしまう。

「くつ。了解した。それじゃ何が何でも勝たないとな！ ありがとう、箒。それじゃ行ってくる」

箒の頭を軽くなで、俺は戦場に向かう。悪いな、セシリア・オル

コット。どうしても勝たなければならない理由ができちゃった。この勝負、貰い受ける！

「それが貴方の専用機ですか。どうやら武器を見る限りでは接近型のようですわね。……ですが手を抜くことはいたしません。本気で行かせていただきますわ」

何やら憑き物が取れたような目でこちらを射抜く金髪、いやセシリア。なるほど先ほどの戦闘で油断がなくなっただか。こりゃ少し難易度が上がったな。

「ふん、いい目をするようになったな。一夏に追い詰められたことがよっぽど堪えたようだな。まあ、そちらのほうがこちらとしても倒し甲斐がある」

「ええ、今までの言動については謝罪させていただきます。申し訳ございませんでした。ですが勝つのはわたくし、セシリア・オルコットですわ」

お互い笑みがこぼれる。だがそれはあっという間に変化してしまうことになる。

『両者、定位置についたようだな。それでは二回戦を始めたいと思うのだがその前に、説明すべき事項がある』

千冬さんからアナウンスが流れる。おそらくあのことだろう。

『今回、桐咲のISのシールドエネルギーを上限一〇〇に設定す

る。これは、先行のオルコットの条件が不利だと判断するものだ。また桐咲は代表相当。これらの理由によりハントを入れることになる。』

セシリアは最初のほうは驚きだったが、状況を理解したのかその顔には怒気が浮かんでいる。

「ちょっと待ってください！！それはいくらなんでもこのわたくしを舐めていませんか！？　そのようなエネルギーではまともに一撃を受ければ一発で落ちてしまいます！訂正を求めますわ！それに、桐咲さんはそれで承しましたの！？」

そう言われてもこちらは苦笑を浮かべるしかない。シールドエネルギー○○というのは俺の『建御雷』の上限が七〇〇だから七分の一。セシリアの言う通りまともな一撃を受ければアウトだし、小さなダメージもそうは負うことはできない。

『異論は認めん。それとこれには桐咲も同意している。文句があるのならば勝ってから言え』

セシリアは悔しそうに顔を歪め、こちらを睨みつける。

「そう睨みつけるな。別にあんたを過小評価しているわけじゃない。候補生ごときが相手に苦戦するようでは国家代表なんかやってはいられない。まあ、俺は代表相当だが。だがそれじゃ納得しないだろう？　では俺がこの試合に負けたならば代表相当の権限はIS委員会に返上してやる。俺もそれくらいの覚悟でいるっていう意思表示だ。文句あるか？」

「——ッ。貴方、本気で言っていますの？……いいですね。それ

では後悔なさい。自信がどんなに愚かな選択をしたのか、わからせて差し上げます！」

そう言って構えるセシリア。本当はまともな状態で相手をしてやりたいんだが、それはまたの機会にしてくれ。その分、本気で行かせてもらっから。

『……では、お互い定位置につけ。それでは二回戦開始する』

ブザーが鳴り、戦端が開かれる。

S i d e : セシリア

馬鹿にして！ わたくしがそう思ってしまうのも無理もないことではありませんか？　いくら相手が代表相当だとしても、同年代。男ということについては、先程の事もありまして油断する気はありませんが……。

狙撃手として冷静さが重要なため、頭を冷やし改めて相手を見定める。

桐咲刀器。二年前、篠ノ之博士によって発表された世界初の男性IS操縦者。貴重な存在として他国が様々なアプローチを仕掛けたようです。ですが、篠ノ之博士やIS委員会の介入があつたせいなのか、その当時わたくしのような末端には情報は入ってきませんでした。もつとも今もですが。ですのでまともな情報はありません。

一夏さんと同様接近型でしょう。ですが桐咲さんは二年前からI

Sを操縦していることから、手慣れているでしょう。ですが相手のISのシールドエネルギーはたったの一〇〇。遠距離から手堅く攻めるのがおそらく上策でしょう。

そして開始の合図。わたくしは身構え相手を目で捉える。その瞬間、相手の姿が掻き消える。おそらくは……後ろ！！

武器同士がぶつかり合う音。

「へー。さすがにこれは防御するか。さすがは代表候補生といったところか」

「当然ですわ。初手のイグニッションブースト。貴方が戦いを急いでいるのはわかりきっていますわ。いくらなんでも先程の一夏さんと同じ手というのは舐めすぎではありませんこと？」

軽口で返すものの、危なかった。先ほどの経験がなければ間違いなく大ダメージを受けていたでしょう。それになんという重い一撃。防御したにもかかわらず、腕がしびれてしまった。

「ははっ、そう言うな。こちららエネルギーが一〇〇しかないんだ。急ぐのはしょうがないだろ？ まあ、今のは様子見だ。さあ仕切り直しと行こうか」

その合図として銃撃で狙い撃つ。ブルーティアーズによる攻撃も交え、こちらに近づけないようにする。あの一撃からもわかるように接近戦ではこちらは手も足も出ない。ならば、接近させないよう誘導して誘い出す。

こちらの狙い通り、あえてわずかに逃げ道を作りそこへ導く。た

しかに早いし動きのキレもかなりのものだ。こちらとしては当たると思った一撃すらも軽々避けられてしまう。なるほど、代表相当というのもうなずける。エネルギーがこうでなければ、ある程度のダメージなど気にせず接近戦に持ち込まれ落とされるでしょう。ですが今は状況が違います。そこは危地です！

「なっ！！？」

ですがそんな思いをあざ笑うかのように彼はこの状況を回避して見せた。切り払ったのだ。光速で飛来するビーム弾を切り伏せるなんて、いったいどれだけの反射神経をしていますの……。一瞬固まってしまったが、その一時が彼にとっては十分な隙だったのでしょう。またしても彼の姿が消える。

またしてもイグニッションブースト！？ ハイパーセンサにより後ろだと判断し、ブルーティアーズを自身の背後に向け射撃する。すでにこちらへの攻撃態勢を取っていたため、当たる！と思った。だがまたしてもそれは裏切られる。

「紫電——」

上から聞こえる声。そんな馬鹿な！？ あの状況からどうやって！？ ブルーティアーズの操作もしているためかもしれないが、唐突の事に体が動かない。だめだ、当たってしまった！

「一閃！——」

鞘から繰り出される刹那の一撃。結局、防御も間に合わず、まともに受けて空から落とされてしまった。絶対防御があるものの、その衝撃は凄まじく、辺りは土埃が舞っている。

さすがに一発では落ちなかったが、シールドエネルギーの半分以上を削られてしまった。このままではまずい。追撃に副えて迎撃態勢を取るうにも体が痺れる。だがもう驚いてはいられない。急いで状況を確認する。

『ブルー・ティアーズ』から情報が知らされる。雷撃属性の攻撃ですって！？ さらに悪いことに追撃が来るアラーム。

くっ！ ビームエネルギーによるスラッシュが容赦なく攻め立てる。

「……悪いな。だが、これは真剣勝負。落とさせてもらうぞ」

少し申し訳なさそうな、だがしっかりしたその声色がわたくしに届く。

ああ、もうこれはどうしようもないですわね……。

——桐咲流抜刀術壱ノ型 『撃震』

その一撃をもつてわたくしの意識は途切れることになる。たしかに負けたことは悔しい。あれほどのハンデを以てしても勝てないなんて理不尽にもほどがある。ですが今回、二回の戦闘は大いに学ぶことがあった。

そして、自身と同年代であれだけの領域にいる。そんな存在がいるこれからの学園生活に心を震わせるのだった。

見ていなさい、桐咲刀器。いつの日かそちらの領域に踏み入れて

見せますわ。

第三話　その式（後書き）

結果だけ見ればオリ主無双の回。
というか今回はえらく短くなってしまったが、まあキリがよかったので。

そして来ました。厨二機体に厨二技。

モデルとしては某マブラヴやら某リリカルな技やら

さて次でクラス代表選出戦は終了。

ここまで読んでくださりありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2566u/>

読み専門の厨二病患者がISを書いたらこうなった

2011年6月28日00時59分発行